

震災・赤字・朝ドラ 三陸鉄道の今 あまちゃんに伴走した三鉄、名台詞「第3セクターなめんなよ」の裏側 震災・人口減を経て次世代にレール

読売新聞 11/12(日) 配信

田園地帯を疾走する三鉄、「これが毎朝流れるのか」

そのドラマは、苦境に陥るローカル線を照らす一筋の光となった。

2013年4～9月、岩手県沿岸部の久慈市などを舞台にしたNHK連続テレビ小説「あまちゃん」が放送された。海女のヒロインがアイドルを目指す物語は、「じぇじぇじぇ」のフレーズとともに全国的なブームを巻き起こす。沿岸部はまだ東日本大震災の爪痕が色濃く、「三陸鉄道」も一部区間での運行が続いていた。「ちょっとでも映っていてくれないかな」。久慈駅長だった橋上和司さん(59)は放送開始の半年前から撮影に立ち会い、そう願ったのを覚えている。完成したオープニングの映像に度肝を抜かれた。ドローンで空撮された列車が軽快な音楽にのって沿岸部の田園地帯を疾走していた。「これが毎朝流れるのか」。胸が熱くなり、少しだけ後悔した。「屋根をきちんと磨いておけばよかった……」(盛岡支局 広瀬航太郎)



「あまちゃん」放送10周年イベントで、海女のはんてん姿を披露するのんさん(4月8日)

都会の鉄道じゃないんだから、「第3セクターなめんなよ！」

それは奇妙な出会いから始まった。

「失礼ですが、どなたですか?」。東日本大震災から7か月後の2011年10月、岩手県久慈市などの沿岸部を走る「三陸鉄道」の久慈駅長だった橋上和司さん(59)は、駅に隣接する車両基地で突然、声をかけられた。見知らぬ男性だった。「どなた? それはこっちのセリフだよ」。そう言いたいのをグッとこらえ、名刺を差し出した。男性は「イノウエ」と名乗るだけで名刺は出さない。翌日も翌々日もカメラを手に訪ねて来ると、仕事について根掘り葉掘り聞かれた。団体客やお年寄りが列車に乗り遅れそうになったらどうするのか。そんな話題になると、こう力説した。「待ちますよ。列車が2、3分遅れたってどうってことない。都会の鉄道じゃないんだから、『第3セクターなめんなよ!』って感じでね」後日、男性が元NHKディレクターで、連続テレビ小説「あまちゃん」の演出を統括した井上剛さん(55)だと知る。お忍びでの取材だった。井上さんは『何あの人? 面白いなあ』とインパクトを受けた」と明かす。井上さんは翌11月も、脚本を担当した宮藤官九郎さん(53)と久慈駅を訪れ、三陸鉄道に乗車した。ドラマでは、「北三陸駅」「北三陸鉄道」として登場し、重要な役どころを担う。登場人物には久慈駅長のキャラクターも生かされた。「第3セクターなめんなよ!」。ドラマの中で杉本哲太さん(58)演じる北三陸駅長の大吉がそうたんかを切った時には頭を抱えた。「俺は何てことを言ってしまったんだ……」



三陸鉄道宮古駅のホームに立つ橋上和司さん(10月18日、岩手県宮古市で)＝富永健太郎撮影



三陸鉄道田野駅で行われた「あまちゃん」の撮影(2013年7月、岩手県田野畑村で)＝三陸鉄道提供



元NHKディレクターで「あまちゃん」の演出を統括した井上剛さん

「ほかの鉄道にはできないだろう」「やってやろうじゃねえか」

2012年10月から始まった撮影に三陸鉄道は全面協力した。2010～16年に社長を務めた望月正彦さん(71)は『朝ドラ』とは知らずに応じたが、全国放送に社員の士気は高まった」と話す。撮影では、通常運行の合間に臨時列車を走らせた。スケジュールに合わせた臨時ダイヤを作成し、早い時は夜明けから現場に立ち会った。運転役は運行本部長の金野淳一さん(63)が担い、時には自らも運転した。

「ほかの鉄道にはできないだろう」。その自負からスタッフの要望には何でも応えた。慣れてくるにつれ、求められるレベルはどんどん上がった。「やってやろうじゃねえか」。そのたびに金野さんと気合を入れ直した。事前に台本を読み込み、場面ごとにどう列車を動かすべきか、自ら考えるようになった。



10～16年に社長を務めた望月正彦さん

運行本部長の金野淳一さん

のんさん「静かに見守ってくれて、すごくありがたかった」

ヒロインのアキを演じたのん(本名・能年玲奈)さん(30)や親友のユイを演じた橋本愛さん(27)と会話を交わした記憶はない。2人は空き

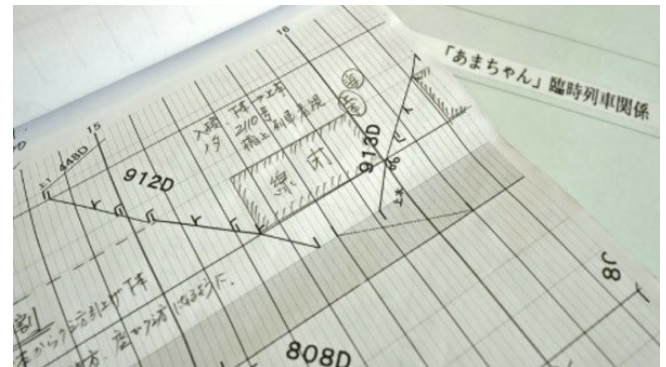


ヒロインのアキを演じたのんさん

時間も台本を手にセリフを覚えるのに集中していた。のんさんは「静かに見守ってくれて、すごくありがたかった」と感謝する。昼敷きの「お座敷列車」で、アキとユイが劇中歌「潮騒のメモリー」を歌うシーンの撮影は思い出深い。「『アイミスユー』と歌うのと同時にトンネルから出てもらえませんか」。本番の直前、スタッフからそう求められた。その瞬間に車内がパーッと明るくなる映像を撮るのが狙いだという。

枕木の本数で距離測り「もうワンテイク！」

ストップウォッチを片手に運転席の横に立ち、線路の枕木の本数を基に出口までの距離を測った。何度列車を走らせてもタイミングが合わない。「もうワンテイク！」。自ら頼んだが、わずかにずれたまま時間切れとなった。悔しかった。井上さんは言う。「『あれはできない』『これはできない』が積み重なると、映像の躍動感は失われ、視聴者は引き込まれない。三鉄の協力があったからこそ、『希望の象徴』となるドラマを描けた」



撮影のために橋上さんが作成した臨時ダイヤ。通常運行を維持しながら撮影用の臨時列車を走らせた。

久慈市で生まれ、地元の高校に進んだ。沿岸部をつなぐ「足」がなく、遠方の同級生は下宿が当たり前の時代。「鉄道があれば家から通えるのに」と感じた。愛着のある地元を離れる気はなかった。高校3年時、開業を控えた三陸鉄道が社員を募集しているのを知る。「新しい会社なら新しいことができるはず」。漠然とした期待を抱き、卒業から半年後の1983年10月、1期生として入社した。19歳だった。1984年4月1日、久慈駅は熱気にあふれていた。沿岸部の住民にとって悲願の「縦貫鉄道」。あちこちに掲げられたのぼり旗に「祝 三陸鉄道開業」の文字が躍った。開業日の半月ほど前、上司から告げられた。「車掌で一番列車に乗るように」。午前6時前の始発に合わせ、午前2時頃に久慈駅に着くと、既に長蛇の列ができていた。「これは大変だ」と身震いした。ベテランの運転指令からは「遅れてもいいから、人だけは轆くすよ」と念を押された。

三陸鉄道の「あの日」…「第3セクターの意地、見せっぺ」

三陸鉄道の歴史もまた、「あの日」を抜きには語れない。2011年3月11日午後2時46分、休みで自宅にいと、激しい揺れを感じた。すぐに久慈駅に駆けつけ、15人ほどの客を高台に避難させた。久慈駅は難

を逃れ、走行中の列車も無事だったが、一部の駅や線路は津波に流されたと知った。「もうダメだろう」。絶望に襲われた。わずか2日後、社長だった望月さんは一部区間での運行再開を決断する。「そんなバカな。余震があったらどうするんだ」。耳を疑ったが、「三鉄が存続できるか、今が瀬戸際だ」という望月さんの決意を伝え聞いた。「社長もギリギリの判断をしている」と自らに言い聞かせ、その日の深夜にダイヤを作り始めた。震災5日後の16日、三陸鉄道は久慈―陸中野田駅間で運行を再開する。3駅間のわずか11.1 km だったが、望月さんは「とにかく走る姿を見せるのが大事だった。全国の鉄道ファンは必ず見て、応援してくれると思った」と明かす。

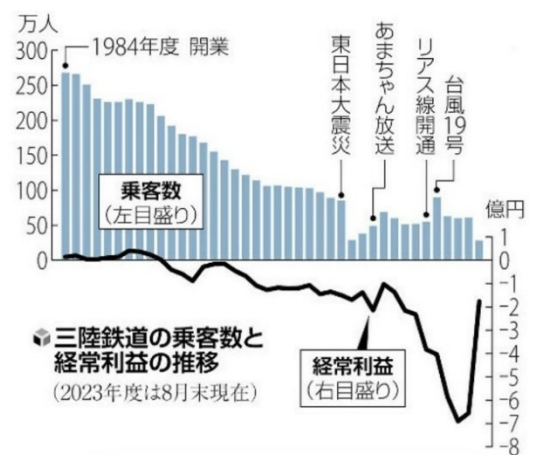
その心意気はドラマにも生かされた。「走るべ。たとえ1区間でも1駅分の往復でもいい」「第3セクターの意地、見せっぺ」。大吉の言葉に皆が奮い立ち、北三陸鉄道は震災5日後に一部区間で動き始めた。「あの日」をどう描くかは、撮影でも大きなテーマだった。激しい揺れで列車がトンネル内で緊急停止し、運転指令から無線が入る。「津波っー！ 津波が来まーす！」。歩いてトンネルから出た大吉とユイは、目の前に広がった惨状に言葉を失う――。その撮影が行われた2013年6月、ロケ地の田野畑―島越駅間は寸断されたままだった。32人が犠牲となった田野畑村にある島越駅は、津波で駅舎が流され、線路はひしゃげていた。心中は穏やかでなかった。「我々にとっても特別な場所。何か触れてはいけない感じがしていた」。事前に周辺の住民に説明して回ったが、不安は的中した。「お前ら何やってんだ！」。スタッフが久慈市から運んできたがれきを広げていると、地元の漁師が嫌悪感をあらわにした。撮影前、現場でお経を上げてもらった住職はこう説いた。「皆さん、仏様は忘れられることが一番悲しいと思います。見た人に『素晴らしかった』と言ってもらえるような、後世に残るドラマにしてください」。救われた気がした。涙するスタッフもいた。現場の空気がグッと引き締まるのを感じた。

ドラマと現実を混同した「お叱り」、反響実感

ドラマの効果は大きかった。13年度の乗客数は前年度比28%増の約49万7000人、運輸収入は同43%増の約2億2600万円に達した。放送期間中は、三陸鉄道にも視聴者からの問い合わせが相次いだ。「駅員が制服でスナックに入り浸るとは何事だ」。ドラマと現実を混同した「お叱り」に反響の大きさを感じた。今年4～9月、BSでドラマが再放送された。放送から10年を記念したラッピング列車の出発式では、のんさんが10年ぶりに海女のはんてん姿を披露した。のんさんは「三鉄は『復興』のシンボル。面白いアイデアで何度も窮地を脱し、立ち上がってきた」と話す。三陸鉄道の置かれた状況は厳しい。地域の人口は減り続け、乗客数は開業年度の268万人を一度も超えたことがない。22年度は61万人。経常利益は1994年度以降、赤字が続く。震災後の2019年10月には、台風19号豪雨で全線の約7割が不通となり、復旧に半年近くを要した。ドラマにも登場した「お座敷列車」や、冬場の「こたつ列車」は、乗客増につなげようと社員が知恵を絞った企画だ。今は社員が沿線の被災状況を説明する「震災学習列車」も加わる。

放送から10年、次の世代にレールを

「そろそろ来る頃か」。9月下旬の朝、普代村の海岸でその時を待った。目線の先には、列車が走る高さ約30メートルの「大沢橋梁(きょうりょう)」がある。ドラマでは、アイドルを目指して上京するアキを、宮本信子さん(78)演じる祖母がここから大漁旗を振って見送った。この日、放送から10年に合わせ、全国のファン約30人が三陸鉄道でロケ地を巡った。コロナ禍で途絶えていたファンとの久々の再会。大漁旗での出迎えは、自分流のサプライズ演出だった。もはや、地元客が増えることは期待できない。いかに外から人を呼び込むかが勝負となる。「『じえじえじえの鉄道です』と言えば、誰にでも分かってもらえる。『三鉄に乗って



みたい』と言う人が全国にいる。あまちゃんは本当に大きな財産を与えてくれた』と言う。先月の会議で1期生の仲間と久々に顔を合わせた。来年開業40周年を迎える三陸鉄道の歴史は、自分たちの歩みと重なる。「『人が乗らない、乗らない』といって赤字だけが膨らむ状況を少しでも食い止めたい。次の世代にレールをつなぐのが、自分の役割だ」と決意する。あまちゃん効果がピークだった2014年夏、久慈駅は列車に乗り切れないほどの人であふれた。開業時の熱気には及ばなくても、まだまだやれることはあるはずだ。

◆三陸鉄道＝岩手県と地元市町村などが出資する第3セクター鉄道。旧国鉄の廃止路線を引き継ぎ、1984年に開業した。当初は久慈―宮古駅の北リアス線と釜石―盛駅の南リアス線に分かれていた。2019年3月に宮古―釜石駅間がJRから移管され、全国の3セク最長となる総延長163キロの「リアス線」が誕生した。

◆広瀬航太郎記者 2020年入社。初任地の盛岡支局で警察や行政を担当し、今年10月から大船渡通信部。岩手県沿岸部を取材する中で「じえ」は耳にしたことがあるが、「じえじえじえ」はいまだにない。26歳。



「あまちゃん」ファンが乗る列車に向かって大漁旗を振る橋上さん(9月23日、岩手県普代村で)